

英米文学史講座



KENKYUSHA

英米文学史講座 第八卷
十九世紀Ⅱ

昭和 36 年 5 月 25 日 印刷 昭和 36 年 6 月 1 日 初版発行

昭和 44 年 2 月 15 日 7 版発行

監修者 福原麟太郎
西川正身

発行者 小酒井益藏 東京都新宿区神楽坂1の2

印刷所 研究社印刷株式会社 東京都新宿区神楽坂1の2

発行所 研究社出版株式会社 ①④② 新宿区神楽坂1の2
振替口座 東京 83761 番

定価 600 円

目 次

イギリス文学概観	石 田 憲 次	1
イギリスの詩歌	大 沢 実	32
イギリスの小説	海老池俊治	59
イギリスの批評	土居 光 知	81
イギリスの演劇	山 本 修 二	102
ヴィクトリアニズム	酒 井 善 孝	120
日英比較文学誌	太 田 三 郎	142
アメリカ文学概観	山 屋 三 郎	160
アメリカの小説	高 村 勝 治	198
アメリカの詩歌	小 泉 一 郎	221
アメリカの批評	刈 田 元 司	240
アメリカの時代背景	斎 藤 真	256
児童文学	石 井 桃 子	271

索 引	295
---------------	-----

イギリス文学概観

石田憲次

ヴィクトリア朝は 1832 年の選挙法改正によって政権に近づいた市民階級、中流階級が上流階級と相結んで政治の実権を握っていた時代である。マコーレー (T. B. Macaulay) は彼等に「偉大なる」という形容詞を付して呼んだが、彼等こそこの時代の主人公であった。下層労働階級は政権から締め出されていて、その不平、要求が不安の種となったが、中流階級は彼等を仲間にひき入れる意志はなかった。その後情勢に押されて、1867 年、1884 年両度の選挙権拡張を行ない、小出しにちびりちびり分け前を与えはしたが、普通選挙には至らなかった。世紀の終りにやっと独立労働党 (Independent Labour Party) が出来るまで、彼等はいわば inarticulate な (物言わぬ) 獣のような大衆であった。

中流階級政権獲得の際の武器はベンタム (Jeremy Bentham) の功利主義 (Utilitarianism) であった。特権階級の「有害な利権」、(いわゆる sinister interest) を排斥して、自由に思う存分に驥足をのべたい。安いところで買って高いところで売り、うんと金を儲けたい。われらは汗水垂らして働く、なまけたり、物の役に立たないような人間が食うに困るのは当たり前だ。Every man for himself, and the devil take the hindmost. 一人は一人としてしか通用しない。各人が各人の利益——快楽を自由に追求するところに理想の社会——最大多数の最大幸福の得られる社会が生れる。功利主義は極端な個人主義であって、社会連帯の観念とは全く無縁である。

この中流階級はしかしまるきりの「経済人」(economic man) ではなかった。彼等は宗教をもっていた。それは概して言えば、非国教派 (nonconformity) のそれであったが、国教に属してもその中で、儀式制度を軽視す

る low church を支持した。両方を総称して一口に福音主義 (evangelicalism) と言ってよいであろう。十八世紀のウェズレー (John Wesley) の影響を被って、個人の回心を何よりも重ずる傾向だ。自分一人救われることが何より大切だ。いわば宗教上の個人主義である。利益の追求に明けくられして他人のことなんか考えない中流階級が、わが魂の救済をのみ念とする宗教をもったのであるから、彼等の良心が狭い、融通のきかぬものとなったのは自然である。アーノルド (Matthew Arnold) が開発せられざる良心の峻厳 (strictness of conscience) を攻撃したのはこのてあいを相手にしてのことである。その彼等の良心が一番重きをおいたのは、人間の肉欲の克服ということであった。彼等にとって不道徳 (immorality) とは男女の間のふしだらに外ならなかった。多少は前の時代のジョージ四世 (George IV) やパイロンなどの代表する、上流階級の不行儀に対するあてつけもあったが、彼等は家庭の幸福ということに最も重きを置き、自ら誇をもった。これは裸体画を排斥し、淑女の前では靴下とか足とかいう言葉の口にすることを憚る極端な御上品振 (prudery) をも招くことともなった。

ヴィクトリア朝の文学は絶えずこういう中流階級を一番大きな読者として書かれ、その支持を受けなければならない運命にあったのである。それは何も彼等に迎合しなければならないという訳ではない。大に彼等を非難攻撃する場合だってあろう。いな、そういう文学者が案外多いかも知れない。しかしそれにしても相手は彼等である。読まれなければ文学そのものが成立しない。

これがヴィクトリア朝文学全体の背景をなす事実であるが、しかしその六十七八年間の文学が一本調子で、同質同傾向である訳ではない。従来ヴィクトリア朝は初期 (Early Victorian Period)、中期 (Middle Victorian Period)、末期 (Late Victorian Period) の三期に分つことがしきたりになっている。これは社会情勢の変化から言って、そういう風に区別するのが確に便宜であるがためであるが、文学もまたかような社会情勢の変化に

随って、その主潮が三度変化しているように思う。以上各期の特色を述べながら、各作家をこれに配して説明することにしよう。しかし各作家の作家生活は決して二三十年の期間に限定される訳ではなく、一つの期から他の期に亘ることがむしろ自然でさえあるから、各作家を一期の作家だとするのは無理であり、各期によって同一作家の作風が変ることさえあるのだけれども、さりとて各作品をそれぞれの属する期において取扱うこととすれば、統一された個人の全体を一度に見ることが出来ぬ不便がある。その辺の取扱は多少の無理を覚悟して適当に処置する外ないであろう。

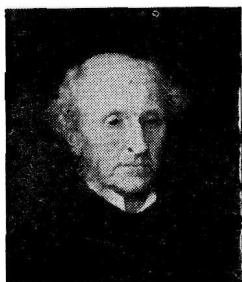
i. 初 期

1832年の選挙法改正によって政権を獲得した中流階級は、1834年には働かざる者は食うべからずという彼等の主義に徹した New Poor Law (新救貧法) を実施し、1835年には Municipal Corporations Act (市町村令) を発布して、全国で得た政権を地方自治体にも及ぼし、いよいよわが世の春を謳歌した。選挙法改正運動の御手先に使われたまま、あとはほってけぼりにされた労働階級は、1838年チャーティズム (Chartism) の政権獲得運動を起したが、1815年この方穀物条例のために高いパンの値が、続く不作で一層高くなり、食うにも食えない有様なので、穀倉や麦束の山 (rick) を焼打するなどの暴動が絶えず、人心恟々あたかも革命の前夜にあるがようであった。これはイギリス国内の情勢であるが、大陸においてもこの期は七月革命 (1830年) と二月革命 (1848年) との間であって、フランス大革命の余波がなお収らず、政情不安の空気がフランス、ドイツ、ベルギー、オランダなどを蔽うた。しかしフランスを初め、どこでも 1848年の革命の失敗のために、人は乾坤一擲の革命の夢から醒めて、地道な物質的繁栄の道を選んだのであった。イギリスでも、チャーティストたちは 1848年に大規模の示威運動 (monster demonstration) を計画したのだったが、思った程の人数が集らずして失敗に帰した。これを最後にチャーテ

イズムそのものが消えてなくなってしまったのであった。その以前、1846年に、穀物条例がピール (Sir Robert Peel) によって撤廃され、パンの値段が安くなり、下層民の不平の種が一つなくなっていたことにも依るであろうと思われる。

カザミアン (Louis François Cazamian) はこの時期を過渡期と名づけているが、文学的に言っても、一方には支配的となった中流階級の心理を現す功利主義、自由主義、理性主義の思想がある上に、他方にはワーズワス、コールリッジこの方のロマンティシズムの影響のなお濃厚なものがあり、どんなのがヴィクトリア朝の本領特色となるか見定めがつかなかったのである。

チェスタトン (G. K. Chesterton) は功利主義をばヴィクトリア朝の「在朝哲学」(philosophy in office) なりと呼んだ。それに反対する思想ほど花々しくはなかったが、やっぱり隠然として一番支配的な勢力をもち続けたのだらうと思う。この派の代表者ミル (J. S. Mill, 1806-73) は晩年には殆ど sage 扱いにされたのである。彼はベンタム



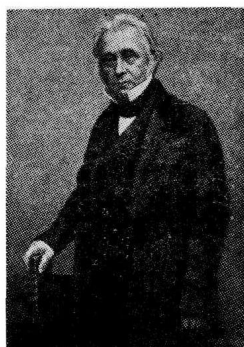
J. S. Mill

と並んでこの主義の創設者とも言うべきジェイムズ・ミル (James Mill) の息で将来二人の後を継ぐ使徒として教育を受けた。いわゆる彼の「精神的危機」を経過して、彼はロマンティシズムにも同情と理解をもつ人間となったが、彼の本領が理性主義的、功利主義的であったことは、彼の著した『論理学体系』、『経済学原理』や、わが国で

大いに読まれた *On Liberty* (『自由論』1859) などによっても分る。*Autobiography* (『自叙伝』1873) はそれ自身興味深いばかりでなく、ヴィクトリア朝そのものを知るためにも絶好の資料となる。*On Liberty* などには一種の情熱人を動かすものがある。

功利主義者ではなく、ジェイムズ・ミルを攻撃したことさえもあるが、

その物の見方が功利主義的で、ヴィクトリア朝の中流階級の代弁者たるかの観があるのは、マコーレー (Thomas Babington Macaulay, 1800-59) である。その立場が最もよく分るのは 'Lord Bacon' ('ペイコン論') の後半である。彼に言わせればプラトンやストアの哲人よりも利用厚生を説いたペイコンの方がえらいのである。自由進歩の現代は手放しに謳歌すべく、昔の温情主義に郷愁を感じるなどは時代遅れのよまい言にすぎない ('Southey's Colloquies')。¹



Lord Macaulay

ヨーロッパの古代、近代の歴史文学に通曉した彼が、その博識を動員して文章を飾り、巧みな譬喩や例話を挿入し、しかも自己の立場に微塵の疑をもたぬかのように、明快極まる論法を以て、実際或は仮構の論敵を論破折伏するところは一種の偉観である。範囲がほぼエリザベス朝に初まって十九世紀にまで及ぶ彼の *Essays* (『論文集』1843) は、今日までもその時代の政治家や文人の伝記を知るには欠くことの出来ないものとなっている。ただニュアンスやデリカシイに欠けている嫌はあるが。

彼の *The History of England* (『英国史』) は 1685 年から 1702 年まで僅か 17 年間、すなわちいわゆる「光栄革命」(The Glorious Revolution) を中心としてその前後を五巻の大冊としたものである。綿密な細部の知識なくしては到底出来ない真似である。これはスコット (Sir Walter Scott) の歴史小説の影響で絵画的描写を意図するようになった十九世紀の史風の一つの記念碑であると言われよう。「光栄革命」はマコーレーの属する自由党 (the Whig party) が彼等の革命として誇称するものであり、マコーレーはそれを不朽にする意図をもって執筆したのであるが、自己啓示的とでも

1. Southey が 1829 年公にした *Sir Thomas More; or, Colloquies on the Progress and Prospects of Society* における回顧主義を攻撃したもの。

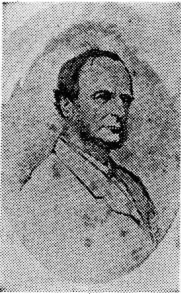
称すべきは、その第三章を「1685年におけるイギリスの状態」の描写に宛て、それを一タヴィクトリア朝の状態に比較し、現代に生くることの幸福を想い知らせようとしていることである。

マコーレーには T. S. エリオットが幼年時代に夢中になって愛読したという Horatius (『ホレイシヤス』) を含む *Lays of Ancient Rome* (『古代ローマの歌』) その他三四の詩作がある。チェスタトンはこの書を相当高く買っているようである。

こういう中流階級の立場に対して、まず最初に反対の声をあげたのは、ニューマン (John Henry Newman, 1801-90) 等のオックスフォード運動である。ニューマン自身の言うところによれば、この運動の口火が切られたのは、キープル (John Keble,¹ 1792-1866) が 1833 年 7 月 14 日になした 'National Apostasy' (『国民的背教』) という説教によってであるというが、やがてニューマンは誰いうとなくこの運動の中心人物とされた。ニューマン等によるに、英国々教は使徒以来、いわば血脈相伝して今日に至っている神の教会、神の器であって神聖なものである。世俗の人間共が勝手気ままにこれに手をつけ、² その改廃をも敢てしようとするのは、冒瀆も甚きものである。「国教は危機に臨んでいる」(The Church is in danger)、これはイギリス国教の聖職に従事する者の袖手傍観すべき時ではない。このような惰夫を立たしめるような言葉を載せた *Tracts for the Times* (『救世叢刊』) が公にされ、1841 年の第九十号がカトリック的な異端邪説を唱うものとして発行停止を食うまで続いた。この運動がワーズワス、コールリッジ等のロマンティシズムに負うところ多きことは、ニューマン自らが認めているところである。ロマンティシズムの歴史尊重の精神をこれは最もよく現している。

1. Keble は *The Christian Year* (1827) という一巻の詩の作者として有名である。

2. その一例は時の政府がアイルランドの司教管区 (bishoprics) を廃したことである。こんなことを坐視するならば、将来どんなことをするかしれない。Cf. Dean Church: *The Oxford Movement*, p. 92.



ニューマン自身は1845年カトリック教に改宗したが、1864年チャールズ・キングスレー (Charles Kingsley) から、彼の新教時代の説教の中の文句を根拠として、カトリック教徒は真理を重んじない人間のように言いなされたことを憤慨した。彼はこのような中傷が平気でなされるのは、カトリック教徒全体に対する深い誤解があるためだと信じたので、進んで彼の生涯が、すべて真理に

Charles Kingsley 忠実に、良心の命令に従順ならんとの一念に貫かれていることを、*Apologia pro Vita Sua* (『わが生涯の弁』1864) の一書によって明かにしたのであった。この書物は殆ど昼夜兼行、白熱的状态の下に書き上げられたもので、文飾のない質素な言葉から成っているが、まことに名文であって、ニューマンはここに再びオックスフォード運動時代のように国民の関心の的となり、カトリック教徒に対する数世紀間の偏見がとり去られたと伝えられる。ニューマンは非常に深い心理解剖家と言われる。それは彼の説教集¹に現れているのである。

カーライル (Thomas Carlyle, 1795-1881) は *Sartor Resartus* (『衣服哲学』) の中で「パイロンを閉じてゲーテを開けよ」(Close your Byron and open your Goethe!) という有名な言葉を吐いた。この場合パイロンによって意味せられているものは、ロマンティズムの主観主義、感傷主義であって、彼はこれを克服して客観主義、行動主義に即すべきことを勧奨しているのである。彼はかくロマンティズムに対する反駁を以て、彼の文学的生涯を始めているやに思われるが、よく考えると、彼はやはりロマンティズムの時代に育った人で、その浸染をぬけきれないところがあるのである。ゲーテ以外に彼が紹介したドイツ文学がロマンティックなものの外に出でなかったことは、アーノルドも指摘したところであるが、彼が

1. 新教時代のものには、*Plain and Parochial Sermons*; 8 vols. (1837-42) などがある。

寡言沈黙、いな意識に対する無意識をすら讚美し、*Heroes and Hero-Worship* (『英雄崇拜論』) のオーディンやマホメットに現れているように、教養訓練よりも粗剛さ (rude strength) を讚美しているように見えるのは、ロマンティシズムの一面であるプリミティヴィズムに囚われたものであり、また *Past and Present* (『過去と現在』1843) において、社会問題解決の鍵を中世僧院のサムソン僧正 (Abbot Samson) に求めたり、十八世紀を “Godless century” (神のいない世紀) などと悪口を言って殆ど全面的に否定し、ピューリタニズムのクロムウェル (Oliver Cromwell) を救い主のように見ることも、ロマンティックな回顧主義に累されていると言うことが出来るだろう。

しかし彼が主観的、感傷的なロマンティシズムから脱却して、隣人のため、社会のために働かなければならぬことを唱えたことは、正に時代の要請に答えたものと言わねばならぬ。カザミアンはカーライルの立場を社会的 (social) ロマンティシズムと言ったが、適評であると考ええる。彼の出世作 *The French Revolution* (『フランス革命』1837) が既にそれをば治者階級の久しきにわたる無責任に対する天の応報という風に解釈して、そこに著述の動機を見出したものであるが、*Chartism* (『チャーティズム』1839)、*Past and Present* は、当面の社会問題解決の緊急を要することに時人の注意を促しその対策を国家干渉に求めようとしたもので、その功は誠に没すべからざるものがあり、彼の示唆は概ね採用されて事実となった。史家としてのカーライルはマコーレーと同様、細部描写にすぐれているが、マコーレーが流麗な叙述によっているのに、カーライルのは示唆的で躍動的 (graphic) な、もっと急迫した文章を用いている。 *Letters and Speeches of Oliver Cromwell* (『オリヴァー・クロムウェルの手紙と演説』1845) は最初伝記を書くつもりで始めたものであるが、どうも出来ぬので、手紙や演説につながるコメントを加えるという形で満足したものである。カーライルの洞察のせいで、それ迄誤解と偏見の下に埋れていた英雄の真面目はここに明か

にされた。テヌ (Hippolyte Taine) はこれに絶讃を与えている。

ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) の小説がリアリスティックな方面に向っていることは疑えないが、彼にはロマンティックな要素が多分に残っている。彼がロンドンの暗黒面を描き、しがない旅芸人や雇人などの生活を明るみに出す時、彼は明らかに偉大なるリアリストである。しかしその手法はというと、それは甚だロマンティックである。彼は初期¹の小説においては殆どプロットというものをもち、節度を失ってひたすら強烈の効果を追求し、センチメンタリズムに陥ったり、グロテスクな印象を与えたりする。カーライルの影響を受けては社会小説に手をつけ、*A Christmas Carol* (『クリスマス・Carol』1843)、*The Chimes* (『鐘の音』1844)、*Hard Times* (『世知がらい世』1854) などを書いた。自叙伝的要素を多分にもつ代表作 *David Copperfield* (『ディヴィッド・コパフィールド』1850) を転回点として、以後の小説はプロットの要素が次第に重んぜられて来る。たとえばわが国でよく読まれる *A Tale of Two Cities* (『二都物語』1859) をとって見ると、話はフランス革命の恐怖政治の頃のパリとロンドンとの間を往き返りし、わが国の歌舞伎に出て来そうな因縁にからまっている二家族の奇しき運命が巧に展開されるのである。次期に取り上げるサッカレー (W. M. Thackeray) と対照する時、ディケンズのロマンティックな面は一層はっきりするのであるが、兎も角彼の多産的な創造能力は全くすばらしいものである。ディケンズの全体の作品の中には、大小様々の人物がひしめきあっている。しかもそれが殆ど皆忘れぬ印象を残すのだからえらいものである。この点ではシェイクスピアにのみ次ぐ。

この時代を最もよく現しているのは一群の社会小説家たちである。ディズレーリ (Benjamin Disraeli, 1804-81) は中世の夢を復活して、貴族の温情によって労働者を救おうという理想をかかげた青年英国党 (Young

1. *Pickwick Papers*, *Oliver Twist*, *The Old Curiosity Shop* など。



Benjamin Disraeli

England Party) のために三部小説と言ってもよい作品¹を物した。キングズレー (Charles Kingsley, 1819-75) は農村労働者を取扱った *Yeast* (『酵母』1848) と酷使搾取されている都会の仕立職人を主人公とした *Alton Locke* (『オールトン・ロック』1850) を著し、「キリスト教的社会主義」に参加した。ギaskell夫人 (E.C. Gaskell, 1810-65) は産業革命の

弊害が一番顕面にあられたマンチェスターの牧師の妻としての体験から、*Mary Barton* (『メアリ・バートン』1848)、*North and South* (『北と南』1855) の二篇を著した。彼女には十八世紀が十九世紀まで生き残ったような静かな田舎町の風趣を伝えた *Cranford* (『克蘭フォード』1853) という捨てがたい作品もある。

しかしこの時代の小説の中でロマンティズムをまるだしにしているのは、ヨークシアの荒野を友としてすごしたブロンテ (Brontë) 姉妹、Charlotte (1816-55)、Emily (1818-48) の二人の作品である。姉の方の *Jane Eyre* (『ジェーン・エア』1847) は美貌にめぐまれぬ家庭教師である女主人公の大胆な恋愛をえがき、遠く隔った恋人相互の霊が危機に臨んで相感応するというような異常心理をも取扱っている。次の作品 *Shirley* (『シャーリー』1849) は世紀の初め頃の機械破壊者 (Luddites) の暴動を取扱っていて、社会小説の数にはいる。妹の *Wuthering Heights* (『嵐が丘』1847) はヨークシアの大地の底から根生えたようなヒースクリフとキャサリン二人の、切っても切れぬ宿命的な恋を取扱っている。キャサリンはリントン家に嫁にゆき子までなしても、心の底の底ではヒースクリフを忘れかねて居り、ヒースクリフが姿を現すと忽ち、紅い焰が炎々と焼けぼくいに燃え上って身を焼き尽す。ヒースクリフの方でも土の下で双方の屍体が一緒に

1. *Coningsby* (1844), *Sybil* (1845), *Tancred* (1847).

朽ちることをせめてもの思いやりにしようと、彼女の墓を掘って隔ての棺の板をのけておくというような執念深さを示す。結婚したこともない作者がどうしてこんな深刻な小説を書いたかは謎である。彼女には神秘的な経験を飾り気なく力強い言葉で歌った詩の作もある。

詩の方ではこの時期はいわば空位時代 (interregnum) である。‘The Bridge of Sighs’ (『吐息の橋』)、‘The Song of the Shirt’ (『シャツの歌』) の両方で社会問題を取扱ったフッド (Thomas Hood, 1799-1845) にはその他にもすぐれた作がある。後のブラウニング夫人 (Elizabeth Barrett, 1806-61) にも ‘The Cry of Children’ (『幼な子の叫び』) という社会的関心を示した詩がある。

テニソン (Alfred Tennyson, 1809-92) はすぐれた知性をもち、終生教養を怠らなかった詩人であったが、この期における彼は主としてキーツに学ぶところの多い、豊かな色彩と甘美な旋律とにすぐれた詩人として注目をひいた。彼のこまかな自然の観察をする目と、繊細鋭敏な耳、k, g というような硬いゴツゴツした喉頭子音、m, l のような滑かな流音、T. S. エリオットも注意しているような¹ 開いた長母音 a, o 等の効果を心にくい迄に使いこなす手腕などは初めから終まで通じて失われない彼の財産であらう。

ロバート・ブラウニング (Robert Browning, 1812-89) はテニソンがキーツに学んだのに対してシェリーに最も心をひかれた詩人である。彼は早く *Paracelsus* (『パラセルサス』1835) のような作品を書いたけれども、この期のうちではまだ世人の大きな注意をひくには至らなかった。しかしその間にも後年有名となるべき素地は養われていたのであって、押韻の才能、故意の中断停止等によって流れるリズムを破って注意を絶えず新にす

1. *Essays Ancient and Modern*, p. 188: “I do not think any poet in English has ever had a finer ear for vowel sound.” この言葉を心に置いて p. 183 にひかれた *In Memoriam*, VIII を繰返し誦んで見よ。

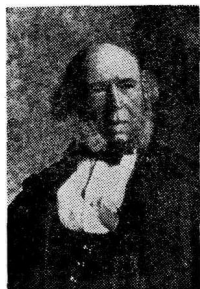
るような技巧、他人の皮下に食い入り、他人の口を借りて己を表白しようとする手法などは人こそ知らね既に円熟せんとしていたのである。

ii. 中 期

前にのべたように穀物条例の廃止やチャーティズムの失敗等によって国内の緊張不安は緩和され、五十年代が始まると共に、イギリスは有卦に入って、前後に類を見ない繁栄を見ることになった。その原因を挙げてみると、汽車汽船による交通運輸の発達、鋼鉄の製法に加えられた著しい改善、カリフォルニア、オーストラリアにおける金鉱の発見、農業機械の使用の普及等、等で、初期に人々の心を脅かしたようなストライキは殆ど跡を絶ち、この期の小説家トロロップ (Anthony Trollope, 1815-82) は、その *The Warden* (『養老院長』1855) の中で、カーライルを Dr. Pessimist Anticant, ディッケンズを Mr. Popular Sentiment と渾名して、彼等の悲観的な社会観を嘲っている程である。

大陸においては、ドイツ、イタリアの統一、普仏戦争とその結果であるナポレオン三世の第二帝国の没落と第三共和国の設立というような事件があったが、イギリスはそのため損をするどころか、益々声威を高めるばかり、クリミア戦争やインドの土兵の叛乱などは、誇張して言えば大象の背中を蜂がさした程度のこと。ディルク (Sir Charles Dilke) という政治家は 1866 年から 7 年にかけて世界旅行をなし、翌年 *Greater Britain* (『より大きなブリテン』) という書物を著したが、ユニオン・ジャックの威光を口を極めて礼讃した。1870 年に露土戦争の後始末のベルリン会議が開かれた時には、イギリス代表のディズレーリの恫喝にあうと、さしもの猛鷲ロシア代表も縮み上って妥協にふみきり、ディズレーリは「名誉の平和」(peace with honour) を携えて凱旋將軍の如くロンドンに帰った。

精神界では、ドイツにおける聖書の高等批評とダーウィンの進化論との影響で、キリスト教の在来の信仰がぐらつき、理性主義が全盛となった。



Herbert Spencer

ダーウィンと相呼応するようなイギリスのスペンサー (Herbert Spencer)、フランスのコント (Auguste Comte) の思想が天下を風靡した。ダーウィンの思想を一般に普及させることに最も貢献した、能文達筆の T.H. ハックスリー (Thomas Henry Huxley, 1825-95) は論証出来ぬものを信じない自己の立場を「不可知論」(agnosticism) と名づけた。かようにして文壇全体に感情よりも理性、空想夢想よりも眼前の事実を

重んずる合理実証の気風が行なわれた。

サッカレー (William Makepeace Thackeray, 1811-63) はディケンズよりも1才年長であったけれども、名を為すことはずっと後れ、明らかにこの期に属する作家である。ディケンズが過度に緊張昂奮しやすい気質の人であるのにひきかえ、サッカレーはむしろ弛緩しやすく、緊張するのに努力を要する人であった。前者の文章が誇張に富み強勢を伴い、時に韻文のリズムさえ帯びるのに対し、後者のそれは晶明で流暢で、むしろ抵抗が少なすぎるかと思う程の上等の散文である。ディケンズが中流の下層や下流の社会を写すのにすぐれていたのに対して、サッカレーは中流の上層や上流社会を描くのを得意とした。

門閥もなければ財産もなく、ただ自分の才分と脳力と、ピカントな容貌の魅力とにたよって、人と人との間を縫い泳ぎ、日向の場所に出ようとするベッキー・シャープ (Becky Sharp) と、良家育ちで、おとなしく人がよく、紋切型の美人であるアミーリア・セドリー (Amelia Sedley) という二人の女性をめぐる多くの男性を描いて、「主人公のない小説」(a novel without a hero) と銘打った *Vanity Fair* (『虚栄の市』1848) はその代りには登場するすべての人物が生きている。「ここにこそ神のゆたけさがある」(Here's God's plenty.) というドライデン (John Dryden) の言葉はこれに移して然るべしと思われる。